

犠牲者の生語り継ごう

相模原事件、京でシンボ

相模原市の障害者殺傷事

件を考えるシンポジウムが
18日、京都市南区の京都テ

ルサで開かれた。事件が起きた知的障害者施設「津久井やまゆり園」の元職員で専修大講師の西角純志氏が講演し、犠牲者の生を語り継ぐ大切さを訴えた。

西角氏は、犠牲者の生前と組んでいた。警察が「遺族の希望」を理由に犠牲者の

名前を公表しなかった点に対し、「犠牲者は殺害される以前から語ることができない人にされていた。容疑者に命を奪われ、家族に封印され、社会に忘れ去られようとしている。(犠牲者を匿名にしたまま裁判に向かうのなら)『生きた証』

は証言としての意味を持つ」と述べた。

犠牲者の園での生活について、西角氏は「出勤してくる職員をいつも小走りで

相模原障害者殺傷事件について語る津久井やまゆり園会議員の西角氏(中央)=18日午前11時20分、京都市南区・京都テルサ撮影 松村和彦



きのよな人。にこにこしていた」「園で50年暮らして、帰りたいと強く思っていた。大好きなお兄さんをひたすら待っていた」と、一人一人の願いや趣味、普段の様子を紹介した。津久井やまゆり園に入所していた人たちが地域に戻れるよう支援する団体「ブルファースト横浜」の報告があり、京滋の障害がある当事者が、施設ではなく、地域で暮らす意義を訴

えていた。お気に入りは演歌だった」「墓石を開ける時のカサカサ音を喜んだ。生

ではないかと懸念を示し、「変わるべきなのは社会の方だ」と強調した。「国際障害者年連続シンボジウム」として、日本自立生活センター(南)などの実行委員会が主催した。〔吉永周平〕

DPLI日本会議副議長の尾上浩一氏は、事件後に障害者排除の動きが出ていたの